

アコースティック×デジタルが融合した 新感覚のデジタル管楽器

アコースティック楽器の電子化や、新しい価値観の楽器の開発など、技術の進歩とともに発展してきたヤマハの電子楽器。昨年秋には、アコースティックとデジタルの技術、ノウハウを融合させたデジタルサクソフォン「YDS-150」が誕生。サクソフォン奏者や、サクソフォンに関心のある人を中心に大きな話題を呼んでいる。

サクソフォンと同様の キレイアウトを採用



キレイアウトは、標準的で扱いやすいアルトサクソフォンに倣っている。違和感なく操作でき、サクソフォンやデジタルサクソフォンの持ち替えもスムーズにいく。

デジタルサクソフォンは、長い間、奏者が切望してきた“静音化”を実現。また、管楽器初心者が簡単に音を出せるハードルの低さや、デジタル楽器でありながら、アコースティックサクソフォンと同じ操作性で、豊かな音色と響き、吹奏感が得られるところも特徴となっている。「実は、開発当初は『サクソフォンをデジタル化する』という大枠が決まっていただけで、楽器の方向性や名前は白紙の状態でした。長年アコースティックサクソフォンをつくり続けてきたヤマハとして、クオリティの高い楽器にしたいという思いがありましたし、そもそもデジタル楽器に“サクソ”と名付けていいのか……という根本的なところから多くの議論を重ねました」と、開発担当の宮崎裕さん。

デジタルサクソフォンの開発には、サクソフォン、電子楽器、ソフトウェア、音響機器など、部署を超えてさまざまなスタッフが関わっている。新しいデジタル管楽器を生み出すにあたっては、それぞれの立場からさまざまな意見、アイデアが飛び出し、なかなか方向性が定まらなかったそうだ。

「そこで『ひとまず試作品をつくってみて判断しよう』ということになり、決めたのが『アコースティックでできるところはそのままに、できないところをデジタル化する』という指標でした。振り返ってみると、この指標をもとに試作品をつくったことが楽器の方向性を決めるターニングポイントになりました」(宮崎さん)

新開発の「ペルー体型アコースティック音響システム」(右ページ参照)の存在も、楽器の方向性に大きな影響を与えたという。

「試作品の段階で『ペルー体型アコースティック音響システム』の原型となるものを搭載しましたが、吹いた瞬間、管楽器らしい響きと吹奏感があり『これはいける!』と確信しました。スピーカーから音を鳴らすだけでなく、管体やベルを含めた音響システムにすることで、いい意味で味のある、管楽器特有の音の鳴りを表現できることがわかりました」(宮崎さん)

細かい部分に至るまで アコースティックにこだわる

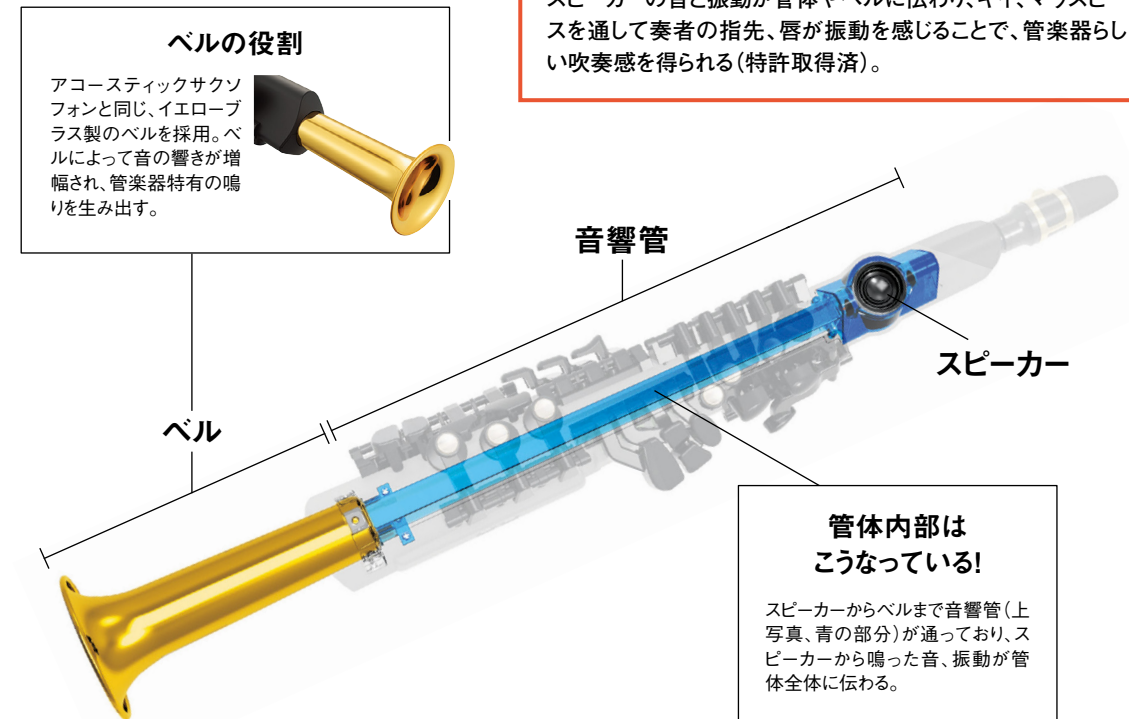
楽器を極力アコースティック寄りにし、“サクソ”という名前を付けた開発陣の思いは、音色からもうかがい知ることができる。

合計73ある内蔵音のうち、56種類はサクソフォンの音色を採用。アコースティックサクソフォンのソプラ

楽器との一体感を生む最新の音響システム

新開発! ペルー体型アコースティック音響システムとは?

アコースティックサクソフォンの吹奏感、音の鳴りを再現する、スピーカー+音響管+ベルの三位一体の音響システム。スピーカーの音と振動が管体やベルに伝わり、キイ、マウスピースを通して奏者の指先、唇が振動を感じることで、管楽器らしい吹奏感を得られる(特許取得済)。



吹きやすさ&リアルな吹奏感を生む技術



専用マウスピース

ヤマハのアルトサクソフォンと同じスタイルの専用マウスピースを採用。独自の設計により、はじめて管楽器に触れる人でもその日から音を出せる。専用樹脂リード、リガチャーも付属している。

ブレスセンサー

奏者の息の圧力(強さ)を計測し、音量、音色を変化させる。

スピーカー

ここから内蔵音が出る。奏者に最適な音が聴こえる開口の大きさに調整されている。

排出チューブ

奏者の息をベルまで届けるチューブ。息の抵抗感を生むともなる。